よかネット
YOKANET
No. 154　2024. 5
（株）よかネット

NETWORK
暮らしと交流を支える地域公共交通を実現する ～添田町地域公共交通計画の策定をお手伝いしました～ …… 2
「豊かな暮らしをつくる団地再生の取組み」 まちづくりコーディネーター養成セミナー in コープ江戸屋敷 …… 4
志賀島の農業を盛り上げる「勝馬ルシェ」 …… 7
見・聞・食
英彦山の麓　津野地区にシェアスペースが誕生しました …… 10
香港における日本食・日本産食材を取り巻く現状 …… 11
三苫校区　防災キャンプの取組み ～自ら考え、行動する力をつける～ …… 12
まちなみフォーラム福岡　in うきは …… 14
表紙解説 …… 16
書評 …… 20
お知らせ …… 20

●都市部以外の自治体でも人口が推計値を上回る

国立社会保障･人口問題研究所（以下、社人研）では、国勢調査の結果をもとに日本の地域別将来推計人口を５年に1回公表しており、2023 年 12 月末に最新の将来推計人口が公表されました。

そこで、九州7県の各自治体の将来推計人口の 2018 年推計値（前回）と 2023 年推計値（今回）、また、2020 年度国勢調査における実績値を比較することで、各自治体における近年の人口動態や今後の傾向をみることにしました。

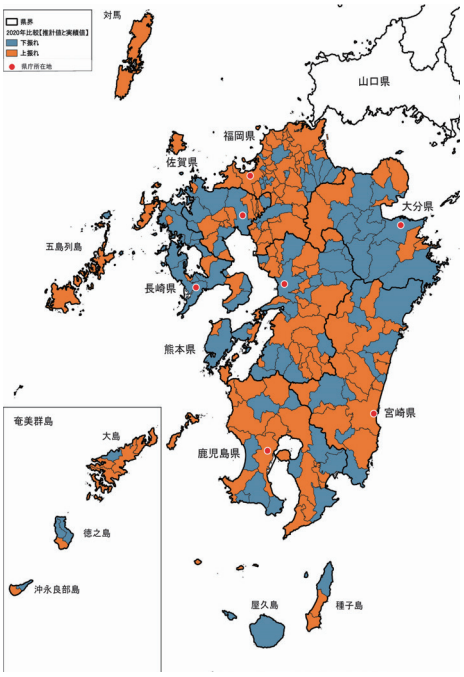
2020 年度の人口実績値が社人研の 2018 年推計値を上回った自治体が多いのは福岡県であり、県内自治体の 73.3%にのぼります。特に、県北部の北九州市から福岡市の間の自治体が多くなっています。

宮崎県や鹿児島県の自治体においても、人口の実績値が社人研の 2018 年推計値を上回る自治体がそれぞれ６割前後と他県と比べ多い傾向にあります。また、県庁所在地に着目すると福岡市を除き、宮崎市と鹿児島市のみが人口の実績値が 2018 年推計値を上回っています。

人口増加が続く福岡市やその周辺都市に限らず、人口減少の進行の抑制や人口増を果たしている自治体もみられるため、多様化する働き方を踏まえ子育て支援や移住定住支援等が充実することで効果がみられるかもしれません。

※詳細は、16 頁の表紙解説をご覧ください。

県名	割合（実績値＞推計値の自治体数 / 県自治体数合計）
福岡県	73.3%
佐賀県	65.0%
長崎県	47.6%
熊本県	57.8%
大分県	38.9%
宮崎県	61.5%
鹿児島県	58.1%
九州７県	60.5%



図・表：九州７県の自治体数の合計のうち、2020 年度の人口実績値が 2018 年公開の社人研の人口推計値を上回った自治体数の割合（国立社会保障人口問題研究所提供の資料より、当社作成）

暮らしと交流を支える地域公共交通を実現する

～添田町地域公共交通計画の策定をお手伝いしました～

山﨑　裕行

ここ数年、通い続けている添田町で、地域公共交通計画の策定をお手伝いする機会を得た。今回は、３月に策定した計画についてご紹介したい。私にとっては久々の公共交通に関する計画策定業務であり、業務推進にあたっては、ネットワーク会社の株式会社地域計画建築研究所（略称：アルパック）の橋本晋輔氏の協力を得た。

●町内の公共交通

町内では、JR 日田彦山線（小倉～添田）、日田彦山線 BRT（添田～日田）、西鉄バス（田川後藤寺～添田）、町バス（まちなかコース、ひこさんコース）が運行し、通学や通院、買い物、また観光などの重要な移動手段となっているほか、デマンド型乗合タクシー「まちいこカー」やタクシーが、鉄道やバス路線以外の部分での日常生活を支えている。

この中で日田彦山線 BRT は、平成 29 年７月の九州北部豪雨により不通となった日田彦山線添田駅から夜明・日田駅間を結ぶ新たな公共交通として令和５年８月 28 日に開業した。運行から既に半年以上が経過したが、今も鉄道（代替バス）時代と比べて多くの利用があり、４月にはバスが増車された。

このように鉄道、バス、タクシーと様々な公共交通が町内・町外を結んでいるが、全国の地方都市と同様に公共交通を取り巻く環境は厳しいものがある。人口減少により、そもそも利用する人が少なくなっていることや、買い物や通院、通勤・通学に際して自家用車がないと不便であること、自家用車移動が普通であるが故に公共交通そのものに乗りなれていないことなどに加えて、昨今話題のバスやタクシーの担い手不足の影響もある。

本計画の策定にあたっては、そのような状況を踏まえ、町民が安心して日常生活を送ることができることを目指すこととした。

●抱える課題

計画策定にあたり、①統計資料による公共交通の利用実態の整理、②町民アンケート、③来訪者アンケート、④公共交通事業者ヒアリング、⑤庁内関係課ヒアリングなどを行い、公共交通が抱える問題点を洗い出し、添田町のまちづくりの方向性を踏まえて課題を次頁のように整理した。

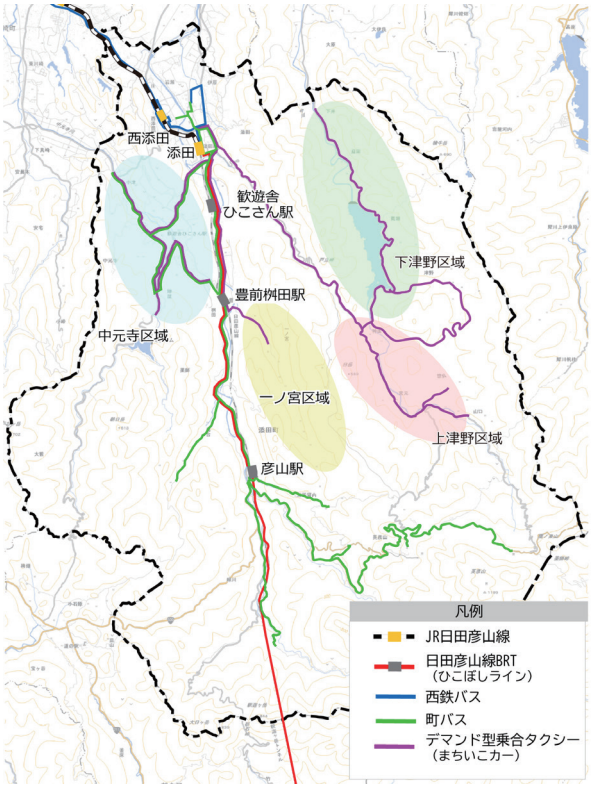


図１：町内の公共交通の運行状況（※上記に加え、民間タクシー事業者１社が営業）

●課題解決の方向性

現状と課題を踏まえ、地域公共交通の将来像及び基本方針、計画期間における目標を次のように定めた。

将来像は、「暮らしと交流を支える地域公共交通を実現する」である。これは、自家用車での移動が中心の添田町にあっても、人口減少や高齢化が進展する中でも高齢者や障がい者をはじめ、町民が通勤・通学や買い物・通院などの日常生活を送ることができるように、交通結節点を中心とした地域公共交通ネットワークの維持･充実を図ること、また、英彦山を中心とした観光振興や、周辺自治体と連携した取り組みにより、町内と町外とを結ぶ公共交通の

表１：地域公共交通の現状と課題

現状	課題
■地域公共交通の利用状況 ・利用者数は減少傾向。直近２年間は、新型コロナウイルス感染症に伴う外出抑制等も影響。 ・利用者が減少する中、利用者１人当たりの運行補助額は増加傾向。 ・町内･町外への従業者･通学者の８割以上が交通手段「自家用車のみ」。 ■地域公共交通に対する町民等の意向（町民） ・外出頻度が少ない人ほど目的地までの移動に不便を感じている。 【公共交通機関別の主な改善要望】 JR 日田彦山線 ：便数や駅構内・車内環境の美化、時刻表などの周知 西鉄バス・町バス ：便数や路線・時刻表などの周知、日田彦山線との乗継 まちいこカー ：乗降場所や運行回数・運行日、利用方法等の周知 （来訪者） ・居住地から添田町までの交通手段は、自家用車の割合が約９割。 【BRT の主な利用促進策】 ・１日乗車券の販売、パーク＆ライド駐車場の整備、博多駅や小倉駅からの企画乗車券の販売など。	■路線の役割に応じた運行水準の維持 ・今後も各路線の役割に応じた運行水準の維持を図る。 ■利用状況や地域ニーズ等に応じた最適な公共交通の運行、運営方法の検討 ・公共交通の継続のためにも、利用者の状況や地域ニーズ等に応じた最適な公共交通の運行、運営方法を検討する。 ■中山間地における移動環境の確保 ・移動に支援が必要な方でも安心して生活ができるように、福祉施策と併せて、総合的に移動できる環境を整える。 ■公共交通の利便性の向上 ・町内と町外とを結び、日常生活だけでなく余暇活動や観光などでも利用が期待される公共交通の維持・充実を図る。 ・町内の公共交通手段が複数あるため、誰もがわかりやすく、利用しやすいサービスを整える。 ■公共交通利用の意識啓発・利用促進 ・高齢者や学生のみならず、町民全体の公共交通利用の意識啓発に取り組み、利用促進を図る。 ・町外からも、環境負荷が低い公共交通の利用促進を図る。 ■公共交通の担い手の確保 ・公共交通の維持・充実のためにも担い手の確保を図る。

利用促進を図ることを意図している。この将来像に対して、３つの基本方針と目標を定めている。

基本方針の1つ目は、「町民が利用しやすい持続可能な公共交通体系を実現する」であり、それに紐づく目標として「公共交通の効率性を高める」を掲げた。

基本方針の2つ目は、「町外も含めて公共交通を利用する人を増やす」であり、それに紐づく目標として「利用しやすい環境を整える」を掲げた。

基本方針の3つ目は、「町民・行政・交通事業者・地域みんなで公共交通を支える」であり、それに紐づく目標として「今ある公共交通を最大限に活かす」を掲げた。

各目標には、その実現に向けた施策と具体的な取組がある。詳細は割愛するが、私自身が本計画で特にポイントと考えている3つの取組を次に紹介したい。

●地域住民の足となる公共交通に向けて

ポイントとなる取組の１つ目は、町が運行している町バスの「利用状況に応じた見直し」である。そもそも町バスは、町内を走っていた西鉄バスが撤退した後、町民の移動手段を確保するために運行をはじめたものである。現在は、「まちなかコース」と「ひこさんコース」の2路線あり、まちなかコースは、交通結節点である添田駅と、日常生活に必要な商店、病院、金融機関等が集まるまちなかとの移動を支える役割を担っている。一方、ひこさんコースは、彦山駅で日田彦山線 BRT と接続し、英彦山観光への公共交通の役割担うとともに、彦山駅と彦山駅周辺の集落とを結び、町民の買い物や通院等の日常生活での移動を支える役割を担っている。

この町バスについては、これまで町が利用状況等を鑑み、路線やダイヤを適宜見直してきたところであるが、今回、新規運行開始までのプロセスや、利用状況等に応じた見直しプロセスを検討し、地域住民をはじめ他の公共交通事業者とも協議を行いながら取り組むことを明示した。また、1便当たりの利用者数に着目し、利用率を高める取り組みを行う一

JR 日田彦山線

西鉄バス

町バス

まちいこカー

日田彦山線 BRT

町内を走る公共交通

方で、それでも利用率が上がらない場合は、その他の移動手段についても検討を進めることとしている。これにより、現在町バス等の運行が無く、駅やバス停まで歩行距離や勾配等がある交通不便地域における移動手段の確保に関する協議や、現在町バスが運行している地域における利用促進に向けた協議のほか、町バスに変わる代替手段確保に向けた協議が、より積極的に行われることを期待したい。

ポイントとなる取組の２つ目は、「まちいこカーの利用状況等に応じた見直し」である。デマンド型乗合タクシー「まちいこカー」は、町バスに変わる移動手段として運行を始めたもので、現在、町内の４区域で運行している。こちらについては、利用者がお互いに時間を合わせることが難しいなどにより、なかなか乗合率が高まらないという課題を抱えており、運行見直しのプロセスや、新規運行開始までのプロセスを検討し、明示した。この他、今は旧バス路線を基軸とする運行ルートであり、乗降に際しては旧バス路線上のバス停としている。高齢者等がより利用しやすくするために、運行ルートを拡大し、自宅付近の乗降を可能とすることを盛り込んでいる。

町民が利用しやすい持続可能な公共交通体系の実現に向けて、地域住民に最も身近な町バスとまちいこカーについては、具体的な基準（県の補助要件以上の利用者数を目指す）や、新規運航開始及び利用状況に応じた見直しのプロセスを示すなど踏み込んだ内容となっている。

ポイントとなる施策の３つ目は、「出前講座、乗り方教室等の実施」である。これは、町民へのアンケート調査で、公共交通の改善点として「時刻表などの周知を図る」という意見が多かったことや、既述のとおり、普段、公共交通に乗り慣れていない状況があることなどを踏まえたものである。内容としては、公共交通の利用方法や、スマートフォン等を使った路線･時刻検索の方法等についての出前講座の開催、実際のバスやタクシーを使った乗り方教室等の開催としている。

●終わりに

本計画は、添田町地域公共交通会議において毎年度、計画全体の推進及び事業の進捗状況について評価し、事業等の改善につなげることで、着実な推進を図ることになっている。また、計画４年目時点には最終評価を行い、計画５年目時点で次期計画策定に向けた検討を進める予定である。

本計画に基づく施策・取組により、町民の皆さんのみならず、来訪者の皆さんにとっても、利用しやすい公共交通の実現につながることを祈っている。

（やまさき　ひろゆき）

「豊かな暮らしをつくる団地再生の取組み」

まちづくりコーディネーター養成セミナー in コープ江戸屋敷

山田　龍雄

私が所属している建築士会まちづくり委員会では、平成 23（2011）年度より建築士が地域の活性化や賑わいづくり、景観やまち並み形成等に係わる中で、建築士としての役割や意義を学ぶ「まちづくりコーディネーター養成セミナー」を開催してきました。

今回は、建築後 45 年を経過し RC 造 4 階建てのアパートの魅力を高めるため、入居者同士や周辺住民との緩やかなコミュニティづくり、敷地全体のランドスケープデザイン、DIY による部屋のリノベーションなどに取組み、入居率、家賃アップにつながったコープ江戸屋敷を訪問しました。

3 月 2 日（土）、14 時に現地集合し、この事業の管理運営のサポートをしてこられた（合同会社）H&A brothers の半田啓祐、満兄弟に現地を案内していただき、ハンダアパート、コーポ江戸屋敷など、これまで半田兄弟が取組んできた事業の説明をしてもらいました。

参加した建築士は 8 名と少なかったのですが、

半田兄弟（左：半田啓祐氏、右：半田満氏）アパートのリノベの部屋で話をしてもらいました

コープ江戸屋敷での7年間の実践活動の内容、その成果も知ることができ、非常に有意義な会となりました。

●コープ江戸屋敷にてコミュニティデザインを実践

コープ江戸屋敷は西鉄久留米駅から南側約2.5km、聖マリア病院前駅から徒歩で約20分のところです。周辺は戸建て住宅地であり、公共交通の利便性はあまり良い位置ではありません。この物件は、平成27(2015)年にビル再生の先駆者である吉原勝己氏が設立したビンテージのまち㈱が、地方都市での団地再生の賃貸経営の可能性について実践するために購入したものです。

吉原氏は、翌年の平成28(2016)年からこの団地の空き室等を活用し、コミュニティデザインやリノベーションの経験豊富な講師の方たちを招き、「コミュニティデザインカレッジ」を8回開催し、参加者と団地再生のヒントを学び、共有しています。

半田兄弟は、平成29(2017)年に吉原住宅㈱の系列会社ではるスペースRデザイン㈱からの委託で、コーポ江戸屋敷の団地運営等に今日まで取組んできています。

具体的には入居者との会話を通じて入居者の要望を吸い上げ、団地内のイベントやワークショップへの参加を促し、入居者同士の輪を広げることであり、その結果として団地の価値を高め、入居率アップ、家賃アップにつなげていくことです。

●空き室を活用した職人シェアオフィスの創設

平成28(2016)年に実施した「コミュニティデザイ

コーポ江戸屋敷　S53年建設 RC造4階建て 3棟48戸

ンカレッジ」では半田兄弟の誘いで久留米市内外から大工、電気工事、造園等の職人が参加した縁で、職人さんたちのシェアオフィス[BASE]を作っています。

職人さんたちは、仕事以外では知り合うこともなく、情報共有もできていなかったのですが、シェアオフィスで定期的な集会をすることでDIY等の新たな技術や仕事の情報交換ができ、仕事も一緒にできるようなWIN－WINの関係作りができたとのことです。今は各職人が元請での仕事も獲得しています。

[BASE]は任意団体ですが、半田兄弟と一緒にコーポ江戸屋敷内の空き室をモデル的にリノベーションしたり、1階に誘致したパン屋、カフェのリノベーション、ウッドデッキ、パーゴラなども作っています。住棟の妻側から1階南側に作られたウッドデッキは、団地の外と内という境界を取り除き、1階店舗へ入りやすい雰囲気を創り出しています。

●周辺の居住者と一緒に花壇づくり

コーポ江戸屋敷のデッドスペースになっていた西側のスペースに入居者や団地周辺の住民の人たちと一緒に花壇づくりをし、「小さな小径」という素敵な空間を作っています。

半田兄弟が講演で話された「人に関心を持つことではなく、人の関心事に関心を持つこと」という表現は、緩やかなコミュニティづくり、人と人を繋ぐ分かりやすい言葉です。その人の興味あること（趣味、好きなモノ、コト）に関心をもつことが、お互いを知るきっかけになり、言葉を交わすきっかけにもなると思います。

何気なく花壇づくりをしながら、さりげない会話

周辺との境界を取り払い、開放的な空間をつくるウッドデッキ

ウッドデッキがつながる１階部にあるコーヒーショップ＆カフェ

入居者と近隣住民と作った小さな小径

テーブルがないため、床の上で外構デザインをスケッチする参加者の面々

から参加した人の興味あることを知り、緩やかなコミュニティが生まれるのかも知れません。

この花壇の管理は近隣の花好きな住民の方も協力して行っているそうです。

●入居者の共感レベルは年々向上

半田兄弟が団地運営のサポートに入った平成 29（2017）年から、入居者同士の共感レベルを客観的に判断するために入居者へのヒアリング調査をしています。

「日常の手伝い（管理協力）」と「イベント参加」と答えた人を「共感あり」と定義づけており、その割合は平成 29(2017 年）に 15%、令和元（2019）年には 40%、令和 3（2021）年には 38%となっています。また、「声掛け会話がある」の割合では 11%→ 37%→ 52%と 2021 年時点で半数を超えており、入居者同士の緩やかな関係性が高まってきています。

吉原さんが団地再生の方向性を示し、半田兄弟が取り組んだイベントやワークショップ、職人集団との協力による外構のデザインと製作（ウッドデッキ、パーゴラ、花壇等）、また、空き室のリノベーション等は、入居者だけではなく、周辺住民にも開けた団地再生となり、当初の目論見どおり家賃アップ、入居率アップにつながっています。

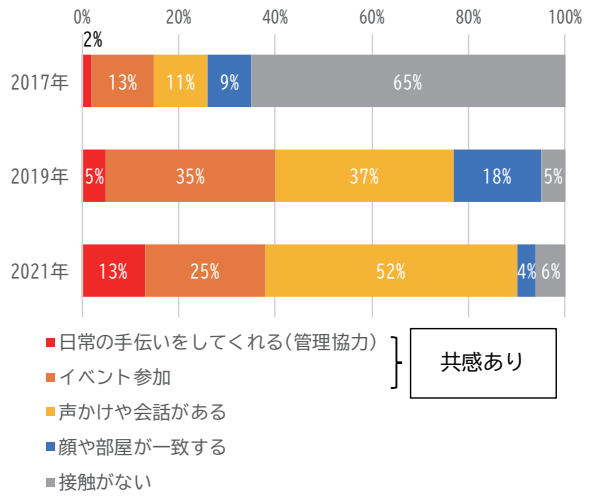
●参加者と一緒にもう一つの外構デザインづくり

今回のセミナーを企画するにあたり、建築士が集まる折角の機会なので半田兄弟に何かワークショップ的なことができないかと相談したところ、住棟の 1 階角地の部屋にテイクアウトショップを誘致したいとの意向がありました。そこで、それをネタに建築士の皆さんに 1 階の店舗、外構のデザインイメージを考えてもらうこととしました。

半田兄弟の講演後、20 分という短いワークショップの時間でしたが、非常に実践的なアイデアも出され、実施される場合に参考にしてもらえれば、この会を実施した甲斐があったものと思います。

（やまだ　たつお）

図１：入居者の関係性の変化の推移



参考文献

1）空き家対策等地域守りに関する調査研究

・「リノベを通じて地域を変える⑤」半田兄弟著

・「リノベ―ションに頼らない地方都市における賃貸経営の実践」：吉原勝己氏講演録

2）豊かな暮らしをつくる団地再生の取組みコーポ江戸屋敷」　講演資料

志賀島の農業を盛り上げる「勝馬ルシェ」

酒見　知里

本誌で何度かご紹介した勝馬ルシェは、福岡市から委託を受けた「農山漁村地域における農林水産業振興事業」の一環として取り組んだものです。取り組むにあたって、当社の山田が会員である志賀島の体験農園「百姓園」を営む北本さんに相談したところ、「志賀島の課題である農家の減少や耕作放棄地増加の改善に繋がる可能性のある農産物を販売するマルシェを開催することを考えている」とのことだったので連携して取り組むことになりました。

マルシェの名前は「勝馬校区」の良さを島外の人にも知ってもらいたいという地域の思いから「勝馬ルシェ」と名付けられました。

令和５年度開催した日時を下記の表にまとめています。北本さんが運営する海の家の喜多乃家で計５日間開催しました。

表１：令和５年度勝馬ルシェ開催日

回	開催日時
第１回	10 月 28（土）、29（日）
第２回	12 月 23（土）、24 日（日）
第３回	3 月 23 日（土）

●初めは出品・出店者集めから

「現在志賀島内に農産物の販売先がなく、和白にある愛菜市場などの出荷先までの距離が遠いので運搬が負担のため、販売をやめてしまった高齢者の農家が、気軽に農産物を持ち込める場にしたい」という北本さんの思いを受けて、直売所のように商品を持ち込むだけの委託販売の希望者も受け付けました。

出品・出店者を集めるため、勝馬ルシェ開催前には、勝馬ルシェ関係者の知り合いに直接声をかけて出品・出店者説明会を行いました。

●広報は総力戦

広報は開催地近辺の小中学校や飲食店にチラシの配布や勝馬ルシェ公式インスタグラムでの発信活動を行いました。しかし、インスタのフォロワーは少なく、チラシの集客効果も未知数のため、力不足と思っていました。

広報で大きく力を発揮したのが、出品・出店者や志賀島に普段から関わる人のインスタグラム発信です。出品・出店者の中には、既にインスタグラムアカウントを持っている人もおり、各自のアカウントのフォロワー（ファン）に勝馬ルシェの情報を届けることで周知に繋がりました。

●事前準備

勝馬ルシェの良さは、出品・出店者の圃場が近く、開催日に収穫した採れたての農産品が購入できることです。今回レジでの管理を効率よくするため、バーコードラベルを発行することにしました。出品農家は開催日の数日前に品目と金額と数を、事務局である当社に LINE で伝えてもらいました。打合せや日時、出品などの連絡、調整や情報の共有は、LINE グループで頻繁に行いました。

その他、当日だけでは準備が間に合わない机や椅子の設置は、出品・出店者に声を掛け、前日に準備を行いました。

第１回青空の下で海を眺めながら買い物

第２回トラックで販売

●第１回スタートは快晴

第１回は青空のもとで開催することができました。海をバックに商品が並んでいるため、来場者は目の前の海を一望しながらショッピングや食事を楽しんでもらえました。

初めての開催ということもあり、開始前からレジには大行列ができ、出店者の知り合いや地元の方々が絶え間なく訪れ、買い物をされていました。その他、サイクリストやドライブ客の立ち寄りもあり、「志賀島に農地があることを知らなかった」という驚きの声も聞こえました。

来場者アンケート結果では、「アンケート回答者の同行者」では小中学校に配布したチラシの効果か子連れ家族が最も多く、ゲームコーナーや海の近くで遊び、楽しむ子どもたちの姿が多くありました。回答者の「居住地」は、島内が１割、その他福岡市内が６割で残りの３割は市外、県外などでした。「志賀島への来訪状況」については、年に数回は志賀島に訪れている人が半数以上、「勝馬ルシェを何で知ったのか」については、人からの紹介が最も多いという結果でした。

●第２回をより良くするために

第２回の出品・出店者説明会では、新たな出品・出店者に勝馬ルシェの説明を行うとともに、第１回の出品･出店者から「お金のやりとりがなく、お客さんとの会話に集中できてよかった」、「レジの行列が商品棚を見るお客さんの妨げになっていた」など、第２回に向けた改善点などを話し合いました。

●第２回は悪天候予報のおかげで素敵な場となる

第２回の天気予報は雨の可能性があり、どのように雨を凌ぐかを話し合った結果、出店者はトラックで販売を行い、すぐに幌を取り付け、雨から商品を守るという案で決まりました。一方、出品者の商品は第１回同様に葦簀（よしず）の下に陳列し雨が降ればマルシェ途中でも閉めて撤収することになりました。

当日は、２日間曇り空で時折小雨が降る状況でした。トラックでの販売が増え、地元農家が行っている雰囲気がより伝わり、来場者を惹きつけたと思います。天気が何度か崩れる中でも、年末年始に向けて籠いっぱいに買い物をする人が多くみられました。

来場者アンケート結果では、勝馬ルシェの公式インスタグラムアカウントから情報を知る人の割合が第１回から15%増えていました。

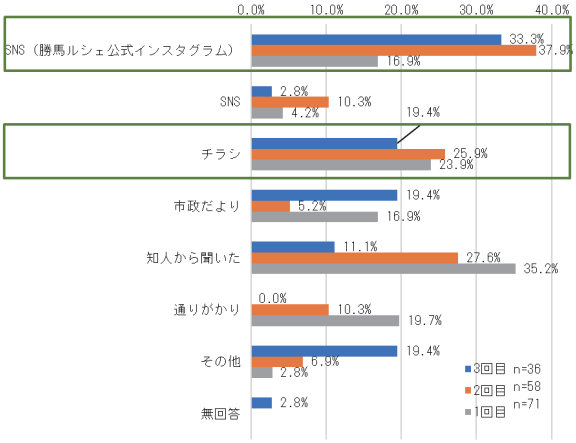
●第３回は雨の中、親と子供で賑わう

第３回は大雨予報で、再び雨対策が議題としてあがりました。開催地は北風が強く、テントを張ることが難しいため、喜多乃家の建物内で開催することが決まりました。

第３回を開催した３月は野菜の端境期で、今まで売り場の６割ほどを埋めていた野菜の品数は少なくなったのですが、いちごが旬だったため多数出品されました。荒天で集客が見込めないと思っていましたが、多くの方が来られ、午前中でほとんどの商品が売り切れるという嬉しい悲鳴が起きました。いちごは、補充されましたが５分後には売り切れるという人気ぶりでした。

天候に関わらず多くの来場者が訪れた要因は、勝馬小学校の取り組みでした。勝馬小学校の発案で、授業の一環として児童が作成した貝を組み合わせた

第３回喜多乃家の室内で開催



来場者アンケート結果（勝馬ルシェの情報入手方法）

キーホルダーなどを、勝馬ルシェの購入者に贈呈する取り組みが行われたため、児童の保護者がたくさん来られました。

嬉しいことがあった一方で２日目は、農産物の数が少ないことから、お客さんに残念な思いをさせてしまうかもしれないという理由で、中止になりました。

来場者アンケート結果では、勝馬ルシェ公式インスタグラムが少しずつ広まり、チラシも効果があることがわかりました。

●地域に根付きはじめた勝馬ルシェ

開催する前は、出品者が集まるのか、手探り状態の中で始めましたが、出品・出店者も集まり、また、多くの購入者のおかげで３回とも想定の売上を超えることができました。

小学校や中学校にチラシを配布したことで、勝馬ルシェが認知され、実際に勝馬小学校との連携した取り組みもできました。島外からは、志賀島で普段から活動をしている方や出品・出店者の繋がりで知った方などが来られ、勝馬ルシェを盛り上げて頂きました。

令和５年度は３回の開催でしたが、「かつお菜は売っていないか」「あのお菓子今日は売ってないね」という声がありました。志賀島産農産物を販売する直売場所として、志賀島に関わる人達に少しずつ認知されてきていると感じています。しかし、島内からの来場者数は少なく、今後も勝馬ルシェの継続開催と情報発信を行い、認知を広げていこうと思います。

●今年度も続く勝馬ルシェ

今年度は毎月第４土曜日（11 時から 16 時）に開催される予定です。今後は、出品・出店者数を増やして、野菜の端境期は品薄状態とならないようにすることや、小中学校などの他の施設や団体と連携するなど、勝馬ルシェに関わる人の幅が広がるといいと思います。

勝馬ルシェを開催するため、出品・出店者の方々は何度も話し合いを重ねられました。今後も継続できるよう応援したいと思います。（さけみ　ちさと）

★勝馬ルシェ開催予定★

志賀島産の季節の野菜果物が購入できます

日時　毎月第４土曜日 11 時～ 16 時
場所　喜多乃家（福岡市東区 257-4）
※最新情報は下記のインスタグラムからご確認ください。

KATSUMA.RCHE

英彦山の麓　津野地区に シェアスペースが誕生しました

山﨑　裕行

ここ数年、業務で訪れている添田町津野地区に、この3月に新しくシェアスペースが誕生しました。施設の名前は､｢里山のシェアスペース　ツノオンド｣。3月22日～24日にかけてプレオープンがあり、22日に訪ねてみました。

ツノオンドとはどういう場所なのか。次のように紹介されていました。

「文脈」「人脈」「山脈」３つの波打つ脈が作り出すツノオンド。

「文脈」が古民家の記憶や津野の暮らしの背景を伝え、「人脈」がこれからこの場所を起点に人と人とを繋げてくれ､｢山脈」がこの場所で過ごす人を優しく見守ってくれる。脈が波打てば生命が芽吹、温度を創り、空気感を伝えてくれる。津野の里山からドクドクと新しい出会いやストーリーが始まる、そんな場所がツノオンドです。

ツノオンドのオーナーは、高瀬舞さん。MY設計室二級建築士事務所の代表です。もともと津野地区出身の彼女は、大学で建築を学び、福岡市内の設計事務所に就職。そこで設計の経験を積み、生まれ故郷である津野に戻ってこられました。戻ってきた当初は、添田町の地域おこし協力隊として、主に空き家活用に関する業務に従事し、この4月に3年間の任期を終えて、今後は、ツノオンドをベースに設計事務所を営まれます。

ツノオンドは､築40年の木造平屋建ての民家を改装して誕生しました。改装にあたっては､｢意図的に元の家の痕跡を残す｣ことをコンセプトに、丸太梁や建具などをできる限り元の家の材料を再利用されています。

見所がいくつもあるのですが、その中でも襖絵や欄間の細工など､今ではあまり見ることが少なくなったものがそのまま使われていて、なかなか、お洒落です。また、ツノオンドは、大きくは｢ミーティングスペース｣｢コワーキングスペース｣｢ギャラリー･フリー

ツノオンド　全景

スペース｣｢キッチン｣という4つのスペースで構成されていますが､コワーキングスペースの天井に注目して頂きたいと思います。天井がアクリル板となっていて、梁だけでなく、棟上げ時のお守りや、飾り物をみることができます。コワーキングスペースから見る里山の風景も良いものがあります。

人口減少が続き、若者が少なくなっている津野地区で、なぜ、ツノオンドを立ち上げたのか。高瀬さんは、次のように語っています（一部抜粋）。

「都会でないと」と同様に｢田舎だから｣という

｢“選択肢の多い田舎に”

「都会でないと」を枕詞に、田舎に住み続けられない理由はたくさんあり、ゆえに田舎から都会へ、人口が流出しています。

やりたいことを諦めず、住み続けられる田舎

その可能性を広げることのできる場の始発点になることを目指します。｣

言葉もあり、その多くは、｢～できない｣が続きます。そうではなく､｢田舎だからこそ～できる｣､｢田舎でも、～できる｣を模索しようとされていると受け止めました。

現在、津野地区のような中山間地域の多くは、人口減少が進み、集落自体が無くなっているところもあります。その一方で、様々なことにチャレンジした結果、若い人が入ってきたり、起業につながったり、外部企業が事務所をかまえたりすることで、人口を維持･増加しているところもあります。おそらく、これからツノオンドを拠点に、色々なことにチャレンジされるのだと思います。

心地よい風が吹き抜ける山里に新しく生まれた

今では珍しい欄間の細工

建物内からみる外の景色

シェアスペースで、窓から眺める里山の風景は、心落ち着くものがあり、ゆったりとした時間を過ごすことができます。添田町近辺にいらっしゃった際は、是非、立ち寄って見てください。営業日等の詳細は、ツノオンド HP（https://tsuno-ond.localinfo.jp/）をご覧ください。　（やまさき　ひろゆき）

香港における日本食・日本産食材を取り巻く現状

原　啓介

2024 年 1 月末に、約 1 年ぶりに香港に出張し、高級和食店のシェフ 4 名や、食材を卸しているバイヤー、JETRO 香港事務所といった方々にお話をお聞きした他、市場や小売店を視察した。以下にその結果をレポートする。

●香港では、中国本土における「日本産水産物禁輸措置」ほどの厳しい対応は迫られていない

2020 年まで、香港は 16 年連続で、日本の農林水産物・食品の世界最大の輸出先だった。

2021、2022 年は中国がトップだったが、中国政府が日本産水産物の輸入を禁止しており、中国本土においては、日本食料理店が仕入先の変更などの対応に迫られる中、香港が日本の農林水産物･食品の最大の輸出先に戻る可能性が大きい。

ジェトロによると、「香港内の日本食料理店は 1,400 店舗で最多で、2 位はタイ料理の 370 店」であり、香港人にとっての外国料理の中で、日本食は最も浸透している。香港日本食飲食店協会の会員の日本人は約 200 人程度と店舗数と比べて少なく、香港人の経営者も従業員も相当な数が存在しているため、日本食料理店は、香港政府にとって「守る対象」である。

親中派の大物と言われるような人たちが日本食関連のビジネスをしており、「香港に入ってくる日本食材は全て安全です。だから、安心してみんな日本料理店に行ってください。　自分も引き続き、香港の中で日本料理を食べます。」と発言しているそうで、日本食料理店というビジネスは、中国と香港の政治リスクに揺さぶられながらもこれまでと同様に継続できる見通しである。

●香港人の訪日旅行が盛り上がる一方で、香港の高級和食店は一部苦戦

香港から日本への訪日旅行者数は、2019 年が 230 万人、2023 年が 210 万人と、9 割回復している。

一方で、香港の高級和食店のシェフやバイヤーからは、先行きについて強気な楽観視はできないという意見も聞こえた。

というのも、コロナ禍では日本に旅行に行けなかったため、富裕層が香港の日本食レストランで 1 食 5 ～ 6 万円の食事をしていた。そうした層が、今は日本に旅行に行って日本国内で消費している。

また、中国国内の不動産不況や株安の影響で、香港観光市場における最大の顧客である中国本土からの観光客がコロナ前の 6 割までしか戻ってきていない。

さらに、昨年、香港と深センの通行が再開され、香港から深センまで高速鉄道を使って 20 分という手軽さもあり、「価格が安い割に食事やサービスの質は悪くない」ということで香港人が深センで食事を

現地高級スーパーでは、写真中央の「福岡県産あまおう」は1パック約2,000円で販売されていた

するのが流行っている。

このような社会的な状況により、香港における日本食レストランを取り巻く状況は芳しく無く、ここから数ヶ月の間に、高級日本食レストランのトップシェフが他のアジアの新興都市に流出するなど、様々な情勢変化がありそうだ。

●香港の青果市場では日本の果物が値下がり

昨年に引き続き、香港の最大の青果市場である油麻地（ヤウマティ）のフルーツマーケットで市場見学をした。昨年は1パック16,000円程度だった熊本産の最高級イチゴが、今年は9,000円。1パック1,000円の熊本産の一般的なイチゴが今年は750円と、ほとんどの果物が値下がりしていた。

昨年の訪問時は1香港ドルが18円、今年は19円と、やや円安になっているとはいえ、それを上回る価格下落である。

この理由についてジェトロでディスカッションしたが、前述のような「訪日旅行の再開の反動による香港現地での日本産高級食材へのニーズの低下」に加え、「香港のB級品市場で一部の日本産果物が格安で売られていることによる、価格引き下げ圧力」もあるのではないかとのことだった。

B級市場については、自分の目で見ることはできなかったので真偽の程は分からないが、様々な方向から値下げの圧力がかかっているようだ。

日本人である私にとっては、日本の生産者からの卸値の低下に及ばない限りは「対岸の火事」であるものの、長期的に見た「日本産果物のブランドの低下」という点では気になる現象である。

●今年も香港とのお付き合いが続きそうです

以上のように、香港への日本産食材の輸出事業は、インバウンドの復活とは反対に雲行きは良くないが、香港のシェフや物流企業がインバウンド事業に参入する動きが出てきており、当社も今年度、「香港の飲食店シェフが紹介する産地見学ツアー」に複数回関わる予定である。

今後も、インバウンド、海外販路開拓など様々なかたちで、引き続き日本の食や観光のPR･販路拡大のお役に立てればと思う。（はら　けいすけ）

三苫校区　防災キャンプの取組み

～自ら考え、行動する力をつける～

山田　龍雄

私が住んでいる香陵校区は戸建て住宅はなく、すべて集合住宅のまちである。しかし、福岡市の「揺れ方マップ」でも警固断層東南部の地震発生は「今後30年のうちにいつ起きてもおかしくない」と記載されており、我が校区でも最大6弱の揺れが発生すると予測されている。私が安心安全部長に就任してから、当時の自治協議会会長の要請もあり、徐々にではあるが災害時に備えて防災・減災活動に取り組んできている。

「防災訓練」では、これまでの定番訓練ではなく、実質的な訓練企画が必要であろうと考え、最近2年間は避難所運営訓練を実施した。また、昨年度からは、自治会だけではなく、災害時に連携体制が必要となる公民館、小学校･中学校校長、消防分団、社会福祉協議会、民生児童委員幹事らに呼びかけて自主防災関係者連絡会を立ち上げた。昨年度は災害の種類別の連絡体制や、各団体別に災害時にどのような行動をするのかについて意見交換を行った。

昨年11月には（NPO法人）福岡管理組合連合会の宮下輝雄氏に講師をお願いし、防災セミナーを開催した。その際に校区防災についてのアンケートを実施した。今後の防災活動に期待することの自由記述欄に「防災訓練に子供達も参加できる企画を考えてほしい」との意見があがっていた。

私も、前々から小中学生のサポートも考えた防災

図1：三苫校区の位置

訓練ができないかと思っていた。アンケート結果を校区自治協議会運営委員会で発表したところ、会終了後に、参加していた東区地域政策課の方から、「子どもの参加を熱心にやっている校区がありますよ。三苫校区です。」との情報を得た。すぐに三苫校区の防災推進委員会の堺会長を紹介していただいた。1月12日にお会いする約束をし、三苫公民館にて堺会長にお話を伺った。

●次の世代に防災・減災力の意識向上を伝える

三苫校区の堺氏は、消防署に勤務されていた時代から体育推進委員として約20年間地域活動をされ、4年前(2019年)の退職を機に防災推進委員の代表になられ、地域の防災活動のリーダーとして活躍されている。

三苫校区は福岡市東区の最北端に位置し、新宮町に隣接している。香陵校区と違って戸建て住宅が多く、人口が約9,200人、世帯数約4,200世帯(令和5年3月末)と香陵校区より人口、世帯とも約1.5倍多い校区である。ハザードマップでは校区東側一帯で高潮による浸水で1～3m程度が想定されている。そのため、近年の大雨による河川氾濫に対して危機感が高い地域である。

このような校区で何故、防災キャンプを始められたのかを尋ねてみた。

「災害時には当然、高齢者や障がい者等の避難を優先に考えないといけないが、将来のことを考えたら、次世代の子どもたちに防災・減災意識をもってもらい、地域防災の意識をつないでいくことが大事であると思い、防災キャンプに取り組んだ。また、防災キャンプを通じて、自分で考え、判断し、行動することを学んでほしいと思っている」と答えらえた。次世代まで考えた取組みに非常に納得すると同時に感銘を受けた。

三苫浜中央公園にてみんなででテント張り

防災キャンプは、防災推進委員・青少年育成連合会、PTA、子ども会育成連合会との連携で実施しており、校区のメインイベントとして取り組まれている。

●中学生になった生徒がサポート役となる

防災キャンプは小学校4年生から6年生が対象で、場所は三苫浜中央公園で行われている。子供たちを数グループに分け、リーダーの選出、テント設営、リーダー会議などを行い、リーダーは本部から連絡事項を各グループに伝え、各グループの意見をまとめなければならない。各グループには夕食のカレーの材料費2,000円を提供し、自分たちで買い物をし、自由にカレーを作ってもらい、テントに一晩泊まってもらうという流れである。

堺会長は、「子どもたちには大人の指示ではなく、自分で考え、行動してもらうことを体験して欲しいのです。考えながら行動し、協力し合うこと、助け合ったりすることのトレーニングになるのです。」と防災キャンプの意義を言われた。

この防災キャンプを始めて4年目になるそうだが、最初に参加してくれた児童が、今では中学生になって、防災キャンプのサポート役となっている。堺さんの思いが、脈々と受け継がれている。

グループ毎に材料費 2 千円でカレー作り

●小学 3 年生、4 年生を対象に「防災授業」

防災キャンプは小学生 4 ～ 6 年生が対象であるが、その前段として小学 3 年生の 3 学期に消防署などについて学ぶ「防災授業」を行っている。これを機会に三苫校区防災推進委員会が講師として地域の防災活動などについての話をしている。これは堺会長が元消防署勤めであったことも大きいのではなかったかと思う。また、夏休みには防災推進委員会主催で小学 4 年生を対象に「防災フェスタ」で座学とワークショップ形式で災害時における「イエス」「ノー」ゲームを行っている。

例えば「ある日、三苫浜中央公園で遊んでいたら、大きな揺れを感じた。地震です。」「あなたなら家に帰りますか?」といった質問をし、「イエス」「ノー」のカードを出させる。

子供たちは「自宅に帰る。家の方が安全だから」「道路が壊れているかも知れないので、その場に留まる」「避難所の公民館に逃げる」など様々な意見がでるが、正解はなく、どれも正解なのかもしれない。堺さんはじめ防災推進委員の方々は、この防災授業や防災フェスタを通じて、子どもたちが防災に関することを家族や友達、あるいは下級生に話をして、防災リーダーに成長することを期待されている。

●翌日に校区一斉の避難訓練

三苫校区では子供たちを対象にした「防災キャンプ」の翌日に、校区住民を対象とした「防災訓練～避難訓練」をしている。

避難所訓練では、三苫公民館、三苫小学校、和白清松園の指定避難所 3 箇所を対象に避難誘導を行い、各避難所からは公民館に設置された防災対

防災キャンプの翌日に校区全体の防災訓練を実施する

策本部へ防災無線を使って避難者数や被害状況などを報告するようになっている。本番さながらの訓練である。

我が校区でも防災訓練をしているが、2 日続けて防災のイベントをしようと思ったら、校区の他の部会、関係団体等の連携、協力を得ないと実施することは不可能である。そういう意味では三苫校区の地域のまとまり、地域力を感じる次第である。

堺会長の熱い思いと校区全体で取組んでいる防災・減災に対する訓練や教育に圧倒された。

子どもたちへの防災を通じての「自分で考え、行動する」という自立の精神は、10 数年後、次世代に引き継がれ、大きく育つことで地域の防災力に大きな差が出るのであろうと思った。（やまだ　たつお）

まちなみフォーラム福岡 in うきは

宮川　武大

1 月 27 日に開催された「第 9 回まちなみフォーラム福岡 in うきは ～伝統と未来をつなぐ、古民家のこれから～（主催:第 9 回まちなみフォーラム福岡 in うきは実行委員会、まちなみネットワーク福岡）」に参加してきました。

まちなみフォーラム福岡とは、「まちなみネットワーク福岡」が福岡県内にある地域固有の文化的・歴史的資産である町並みを後世に残すために、毎年開催されており、各地の町並み保存運動を行う方々と意見交換や交流、様々な角度からの討論を行う場です。今回の開催地は福岡県うきは市の「うきは市

筑後吉井の町並み

筑後吉井地区を流れる南新川

筑後吉井」（重要伝統的建造物群保全地区）で、午前中に地域住民の方に地区内を案内してもらいながら、まちを歩きました。

筑後吉井地区は江戸時代に久留米の城下町と日田を結ぶ豊後街道沿いの宿場町として栄え、酒や砂糖、ろうそく等の加工産業が集積しました。中でも、ろうそくは品質が高く、燃やしても煤が出ないということで有名だったそうです。また、地区内の南新川は、江戸時代初頭に5人の庄屋によって、筑後川から水路が引かれたもので、筑後川への水運が可能になり、商品作物の集積地となりました。

この地区は明治時代初頭までに3回の大火に見舞われたため、茅葺き屋根から耐火性のある瓦葺き土蔵造りとなり、今の町並みが形成されました。

●5人の庄屋による川づくり

重要伝統的建造物群保全地区である筑後吉井地区は筑後川など周辺の川の水位よりも土地が高く、水が思うように使えず、苦労していました。そのため、穀物の収穫量も少なかったことから、江戸時代初頭に農民の飢えを見かねた5人の庄屋が約10㎞離れた筑後川から水を引き入れようと考え、久留米の有馬藩へ嘆願書を提出しました。嘆願書には「工事の費用は、5人の庄屋が全部受け持ち決してお上にはご迷惑をかけませぬ。」と書かれ、工事の時には地域の老人や女性、子供までもが関わり、約2カ月で人工の川（北・南新川）が完成したそうです。

川ができたことにより、田畑が潤い、水源を利用した水車や唐臼が造られ、精米や酒造などにも活躍したそうです。また、川の水は筑後吉井地区内の用水路でもあり、防火や生活用水として活用されたり、

案内人による居蔵の館の解説

子供達の遊び場になっていたそうで、河童伝説があり、河童の石像も点在していました。

●居蔵の館（旧松田家住宅）

居蔵の館（旧松田家住宅）は、製蝋業で財を成した大地主の分家で銀行経営に携わっていた一家が住んでおり、店舗兼住宅として使われていました。明治末期に建設され、大正初期に改築されたこの建物は筑後吉井地区の中でも完成度が高く、代表的な建物です。建物は2階建てで、庭には井戸、井戸の近くには炊事場や浴室などの水回りがあり、当時の使われ方を鮮明に思い浮かべることができます。大黒柱には欅が使われ、2階までの通し柱は8mの長さで、美しい経年変化が見られました。また、1階の神棚の上は人が通らないように2階が設計されていたり、通り沿いの雨戸を鉄板にすることで、延焼を防いだり、多くの工夫が盛り込まれている建物でした。

●筑後吉井おひなさまめぐり

筑後吉井地区では毎年「筑後吉井おひなさまめぐり」を開催しており、数カ所の施設や店舗で雛人形

居蔵の館敷地内にある井戸

床の間に飾られたおひなさま

を展示するそうです。私が見学した際は、イベント準備のため、見学する建物には多くの雛人形が飾られていました。飾られている雛人形の中には住民や一般の方から譲り受けたものもあり、それぞれで違いもありました。

関東と関西では男雛と女雛の位置が違うそうで、関東雛は向かって左が男雛、京雛は向かって右が男雛だそうです。今回は関東の飾りが多く見られました。他にも雛人形の地域による違いがあり、関東の雛人形は目鼻立ちがはっきりとしていますが、京雛は切れ長の細い目となっていたり、仕丁（一般的な雛飾りの5段目に座っている貴族のお世話をしていた人）の持ち物も関東では大名行列で使用する台傘、沓台、立傘ですが、京雛では宮中で使用する熊手、ちりとり、箒だそうです。また、眉がなかったり、お歯黒の雛人形は既婚者であったり、飾っている花によって意味が違うなど、様々な違いがあるそうです。

他にも、雛人形や歌舞伎などを題材に、女性が手作りで、新聞紙と余った布、綿、竹などで作られる雛人形であるおきあげ雛と呼ばれる雛人形も飾られており、畳の縁に刺して飾られていました。

このように案内人の方々は町並みだけでなく、イベントに関する解説もしてくださったため、知識の幅を広げることができました。また、歴史的町並みと伝統的な日本文化を掛け合わせたイベントは空間的に相性が良く、現代では失われつつある情景を見ることができ、貴重な経験でした。

（みやかわ　たけひろ）

■表紙解説

今回は、国立社会保障・人口問題研究所（以下、社人研）から公開されている将来人口推計と国勢調査による人口を照らし合わせ、九州内の自治体の近年の人口動態や、今後の人口推移の傾向に着目しました。

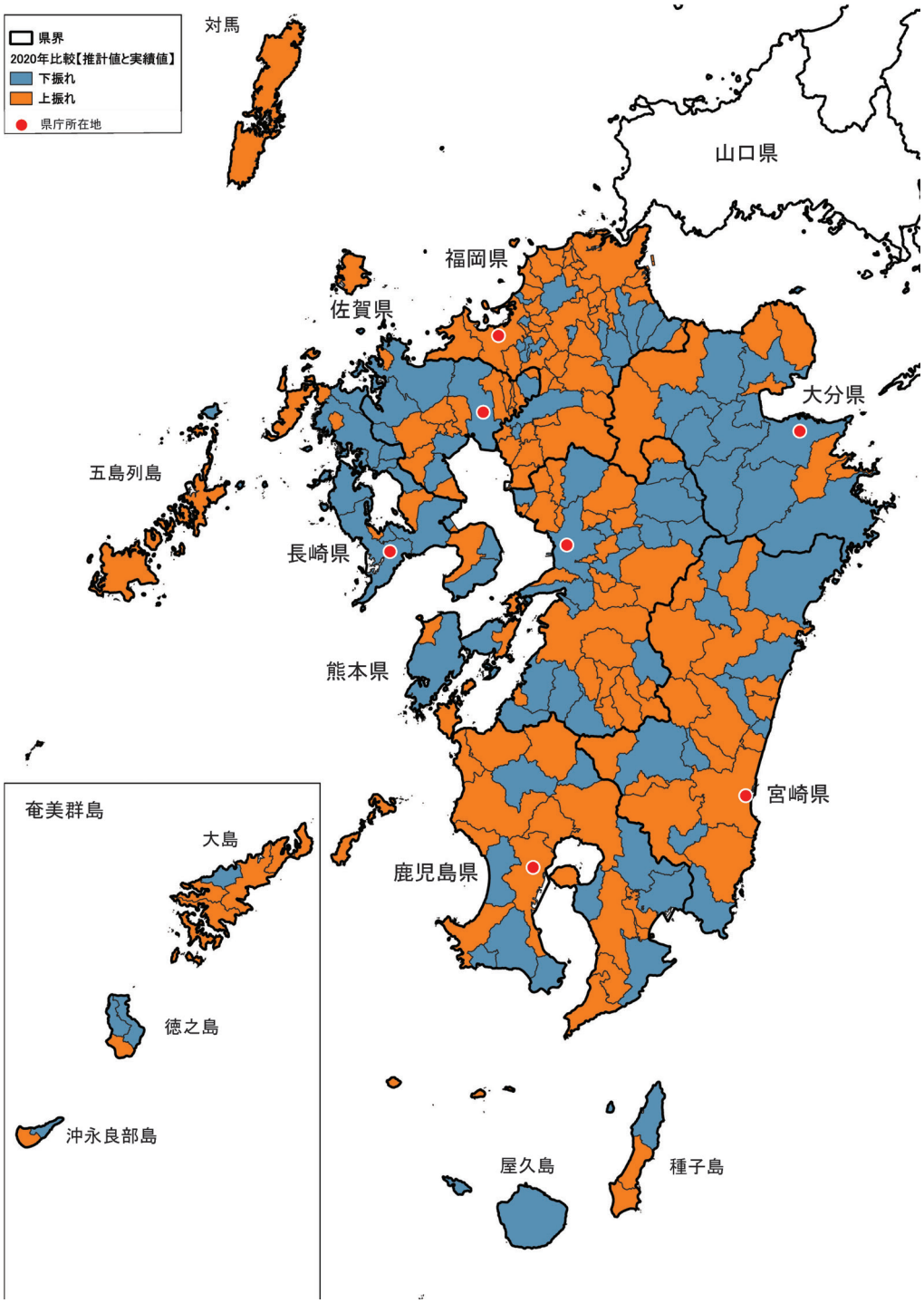
図1は、社人研が2018年度公開した2020年度の将来人口推計値と2020年度の国勢調査の人口実績値を比較したものです。人口の実績値が推計値を上回った自治体を橙色、下回った自治体を紺色で表しています。

2020年度の人口の実績値が社人研の人口推計値を上回っている自治体は、九州7県全233自治体のうち141自治体（60.5%）となっています。福岡県は、九州7県全体の平均と比べ10ポイント以上上回り、北九州市から福岡市の中間にある自治体が多くなっています。また、福岡市周辺に隣接する佐賀県の自治体の一部では人口の実績値が推計値を上回る傾向がみらます。

宮崎県、鹿児島県の自治体においても、人口の実績値が社人研の推計値を上回る自治体が県庁所在地周辺にみられ、他県と比べると多くなっています。また、長崎県や鹿児島県などの離島の中にも実績値が推計値を上回っているところがみられるなど、自治体の取組の成果が一様ではないことがうかがえます。

図2は、実際の人口増減を把握するために、2015年度及び2020年度の国勢調査の実績値を比較し、近年5年間の人口推移を整理したものです。2020年の人口の実績値が2015年と比較して増加した自治

図１：2020 年度における国勢調査の人口実績値と社人研の人口推計値（2018 年公開）の比較



体は赤色、減少した自治体は減少率に応じて色の濃淡で表現しています。

2015 年度から 2020 年度の５年間で人口が増加したのは 34 自治体であり、福岡県が 21 自治体で最も多いです。そのうち、福岡エリア（福岡市、太宰府市、糸島市、筑紫野市など）が 16 自治体と福岡市周辺部の自治体が多くなっています。福岡市は近年人口増加が著しい一方、福岡市周辺の自治体への人口流出も進んでいます(図３参照)。市内の家賃上昇や分譲住宅の価格上昇といった住宅コストの増加等の影響が要因として考えられます。

また、熊本市や鹿児島市などの県庁所在地では人口が減少し、その周辺自治体の人口増加がみられます。宅地開発等が進んだことがその要因として考えられます。

一方、九州山地を取り囲む山間部や離島（奄美大

図 2：2015 年から 2020 年の５年間における人口増減の関係

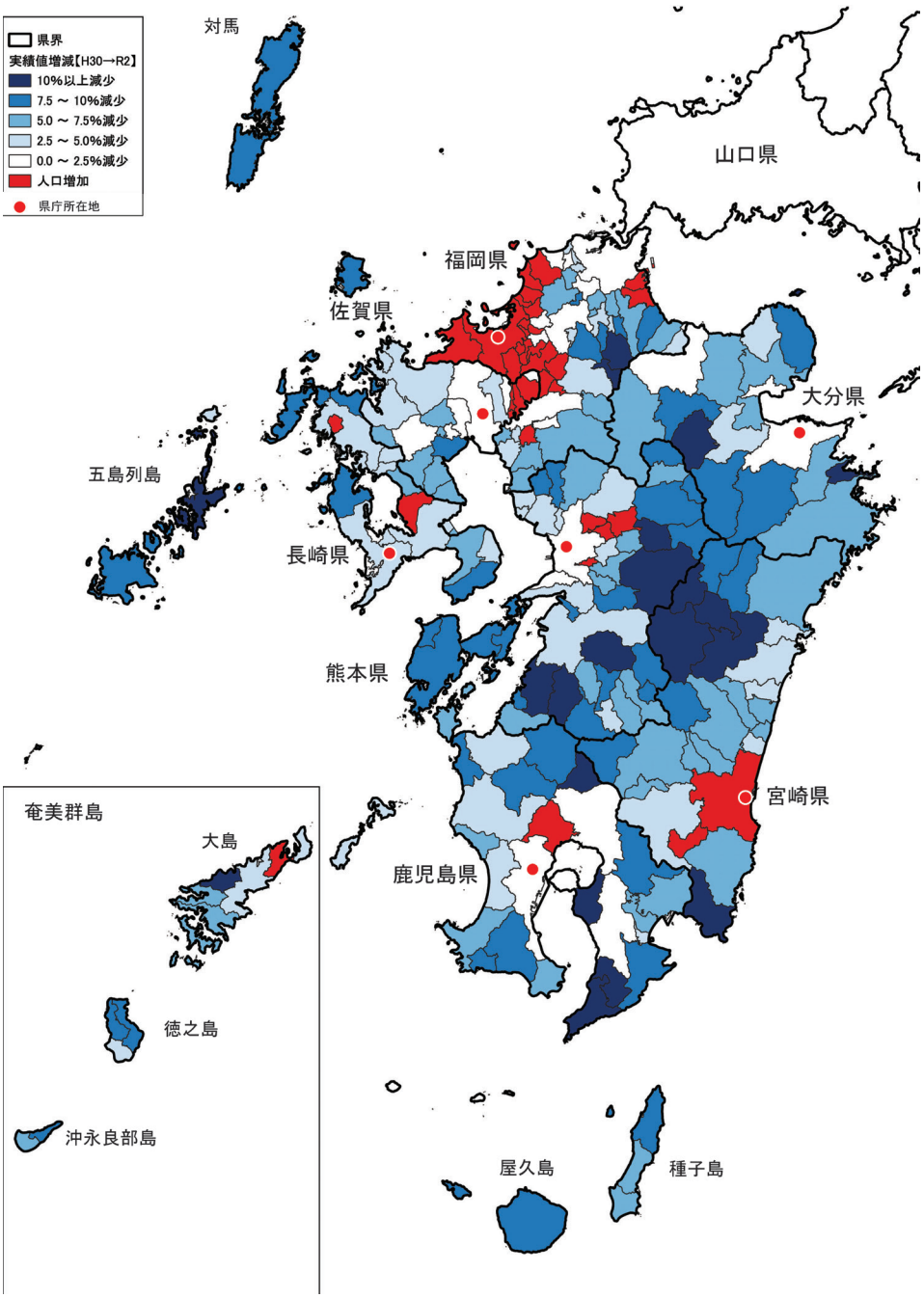


図 3：2015 年から 2020 年の５年間の福岡市の地域別転出入の状況

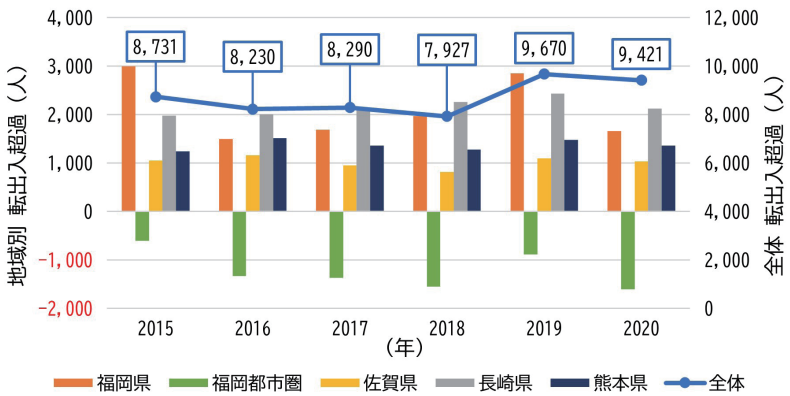
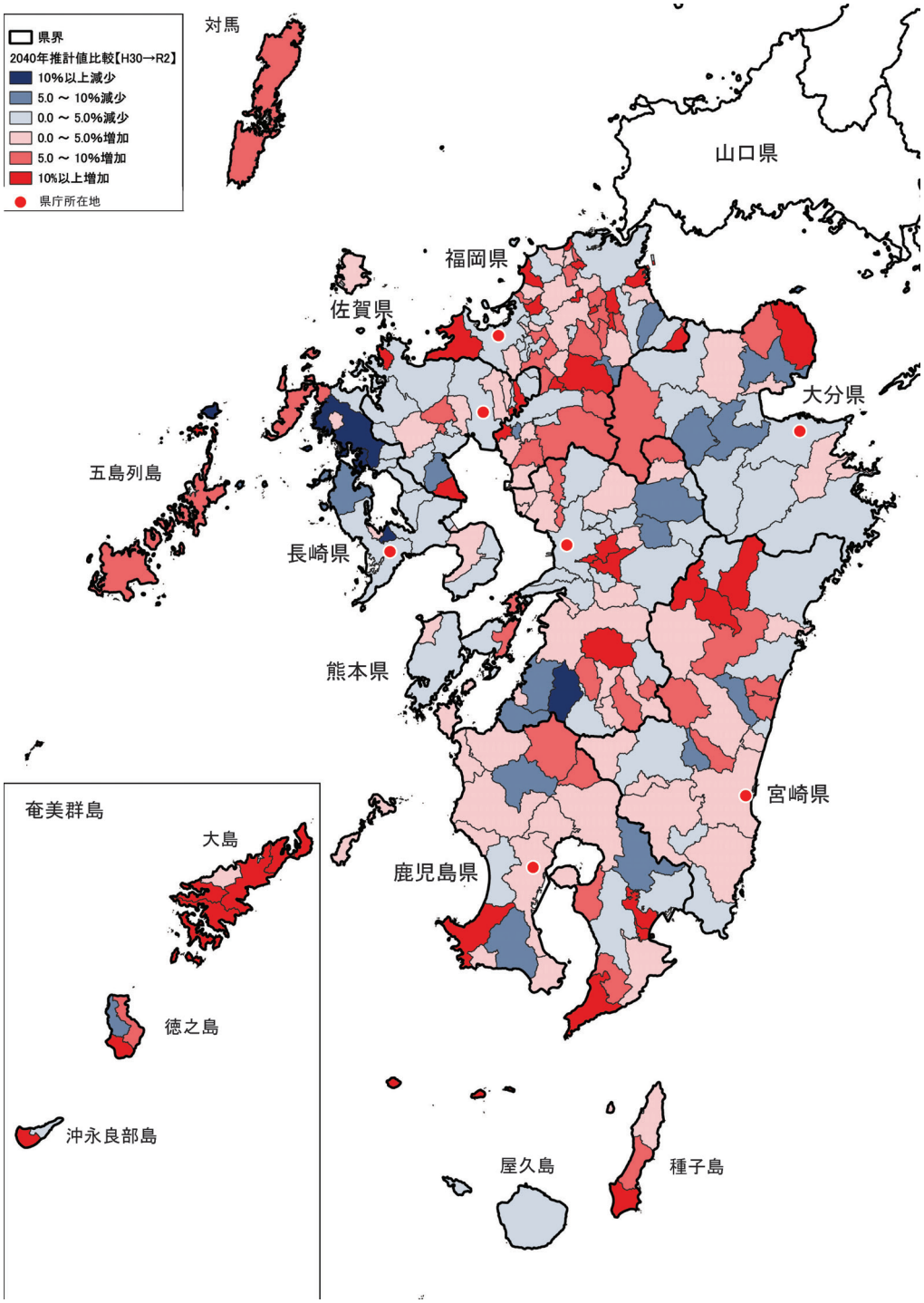


図４：2018 年推計及び 2023 年推計の 2040 年度における推計人口の比較



島を除く）の自治体の人口減少が進んでおり、2015 年から 2020 年の５年間にかけて 10%以上減少した自治体も多くみられています。ただし、奄美大島においては、他の離島と比べ人口減少の進行度合が緩やかであり、龍郷町では人口増加に転じています。

図４は、将来推計人口の 2018 年推計と 2023 年推計の結果の違いを、将来人口推計値（2040 年度）でみたものです。2023 年推計が 2018 年推計よりも上回った自治体を暖色、下回った自治体を寒色とし、増減率の大小を色の濃淡により表現しています。

2023 年推計が 2018 年推計を上回ったのは 145 自治体あり、九州全 233 自治体の６割となっています。2020 年の実績値が推計値を上回ったことから、2040 年の推計値も上回っていると考えられます。

2015 年から 2020 年の５年間における人口減少率の大きい奄美大島（竜郷町を除く）、五島、対馬な

ど離島の自治体では社会増となっているところがみられます。その結果、2023 年推計が 2018 年推計と比べ５％以上増加した自治体は、都市部や平野部の自治体と比べて多くなっています。

福岡市や北九州市など政令指定都市の将来人口推計値（2040 年度）は、2023 年推計が 2018 年推計を下回っていますが、近年人口増加の進んでいる政令指定都市周辺の自治体（糸島市、苅田町など）では 2018 年推計を 10 ポイント以上上回っています。

今回の分析を通して、近年は福岡市周辺の人口増加が顕著であり、社人研が公開している推計人口を上回るなど今後暫くは福岡市周辺への人の流れが続くことが考えられます。また、離島など交通アクセスが限定的な地域においても、テレワーク等の働き方の多様化や子育てや移住定住等の支援が充実することで今後伸びていく可能性があると思います。

（櫻井恵介／益戸亮平）

■ BOOKS

『まちの町医者
備忘録』

著者　尾関利勝

目次

第 1 章 始まりは〇ターン
第 2 章 赤煉瓦工場再生
第 3 章 水の名古屋をさかのぼる
第 4 章 地域主義で選ぶ
第 5 章 港まちから空港へ
第 6 章 町なか再生
第 7 章 遠方の依頼に応えて
第 8 章 国を越えて
第 9 章 地域づくりの計画
第 10 章 本丸御殿復元を志す縁
第 11 章 まちの歴史を伝える
第 12 章 藝が結ぶきずな

今回紹介する本の著者、尾関さんは、アルパックの大先輩で、名古屋を中心に活躍されていた。

私はアルパックの九州事務所に入社したのだが、その 9 か月後には事務所は現地法人として独立した。独立はしたものの、業務上はアルパックとの連携は継続しており、現在も続いている。

初めて尾関さんと会ったのは、入社して初めての本社での研修先だったと思う。その後、博多山笠の時とか、北九州の仕事などで福岡に来られた時に夜のお付き合いをして、朝帰りをしていたことを思い出す。

本の中にも九州での仕事のことは書いてあるが、舁き山見学の失敗談の方が記憶に残っている。備忘録の構想から足掛け 3 年をかけて記されたようだが、関りのあった人たちや、仕事を依頼された経緯、仕事の中身など、かなり詳細な内容が書かれている。すごい記憶力だと感心している。まちづくりのコンサルタント、シンクタンクがどういう活動をしているのか、興味のある方にはお勧めの本である。

（山辺眞一）

お知らせ・編集後記

5 月 17 日（金）～ 19 日（日）にかけて、研修旅行のため、会社を不在にします。お問い合わせ等は、電話またはメールにてお願いいたします。ご迷惑をおかけしますが、何卒、ご理解の程、よろしくお願いします。

よかネット　No. 154　2024.5
（編集・発行）
㈱よかネット
〒 810-0802 福岡市博多区中洲中島町３番８号
福岡パールビル８階
TEL 092-283-2121　FAX 092-283-2128
http://www.yokanet.com
mail:info@yokanet.com
（ネットワーク会社）
㈱地域計画建築研究所
本社　京都事務所　TEL 075-221-5132
大阪事務所　TEL 06-6205-3600
東京事務所　TEL 03-5244-5132
名古屋事務所　TEL 052-462-1030